

のは、この事件は二月——六十二年の二月——に起つたもので、社交生活がまだ十分に活氣ついでる季節のことであつたからである。コンズル・ブッデンプロオク夫人の友達仲間でも「イエルーザレムの夕」に、レーア・ゲールハルトが朗讀中一息つく度毎に、ゼナートル・メルレンドルプの死に就いて語り合つた。日曜學校の小さな女生徒でさへ度しやかにブッデンプロオク家の廣い鋪床を通り過ぎる時、いつもそれに就いて私語いたものである。グロッケンギーセル通りのシュトゥット氏は上流社會に交際のある彼の妻とこの事件に關して詳細に話し合つた。

然しながら興味は過ぎ去つた事件に何時迄も向けられてゐる譯にはいかなかつた。この老議員逝去の噂が喧傳されると殆ど同時に一つの重大問題が湧き上がったのである……ところで、彼が埋葬される時になると、あらゆる人々の心を支配したものは唯もう此の問題ばかりであつた——即ち後任者は誰か、といふのである。

何といふ緊張、何といふ潜行運動！ 中世の名所舊蹟や雅致に富んだ近郊の風景を見物するためにこの市を訪れた他國の人は之に少しも氣附かないであらう。然し何といふ

活動がその裏面に馳驅してゐることか！ 何といふ煽動が！ 堅固な、健全な、何んな懷疑からも惑はされない種類の意見が衝突し、各々信念を固持して罵り騒ぎ、互に検討し、そして徐々に、徐々に疏通し合つて行く。情熱が煽られてゐる。名譽心と虚榮とがひそかに渦を巻いてゐる。棺に封じ込まれた管の希望が動き出し、立ち上がり、ふらふらと迷ひ出るが、忽ち幻滅を感じさせられる。ベッケルグルーベの老商人クルツは選挙の度毎に三票か四票を獲得してゐるが、今度も選挙の當日には自宅に頼へながら跪坐つてゐて、叫び聲に聴き耳を立てることであらう。然し、彼は今回も當選しないだらう、彼は愚直と自己満足に充ちた顔付で、歩道を散歩杖で小突く事を止めないであらう、そして彼は、ゼナートルになれなかつた、といふこの竊かな怨みを懷いて墓へ入るであらう……

ジュームス・メルレンドルプの死が木曜日のブッデンプロオク一家の家族的午餐の席上で語られたとき、ベルマネーデル夫人は若干遺憾の意を述べて、それから、舌の尖端を上唇のところ遊ばせながら何か意味あり氣な狡い眼差で兄の方を眺めた。このことはブッデンプロオクの婦人連を

誘つて言ひ現はし難い皮肉な視線を交換させ、それから、一同揃つて號令をかけられたやうに寸時の間眼と唇を全く固く閉ぢさせた。コンズルは一瞬間狡獪な微笑で妹に應へ、それから談話を別な方面に向けた。彼はトオニーがひそかに楽しんで思ひ廻してゐる考へが市中で喧傳されてゐるものであることを知つてゐた……

折角、名乗りをあげたものゝ、忽ち排斥を喰つた候補者もあつた。するとそのお代りが浮び上つて篩にかけられた。かのベッケルグルーベのヘンニング・クルツは齡をとり過ぎてゐた。若々しい力が今はどうしても必要であつた。材木商で、その數百萬の富がまさかの場合には可成り重きをなす筈であるコンズル・フーノイスは彼の兄弟が元老會に屬してゐるとの理由で立憲的に除外されてゐた。葡萄酒商人のコンズル・エードゥアルド・キステンマーケルとコンズル・ヘルマン・ハーゲンシュトレームは候補者名簿の上に踏み止つた。然し、最初からこの名前、即ちトーマス・ブッデンプロオクといふ名前も絶えず人の口に上つた。そして選挙の日が切迫するにつれて、彼がヘルマン・ハーゲンシュトレームと共に、當選の確實性を最も多く持つてゐることが

愈々明かになつて來た。

疑もなく、ヘルマン・ハーゲンシュトレームは味方と崇拜者を持つてゐた。公の事に對する彼の熱誠、シュトゥルンク・ハーゲンシュトレーム合名商會が勃興し、發展して行つた驚嘆すべき急速度、コンズルの豪奢な生活振り、彼が采配を揮つてゐる家屋敷、朝食に攝る鷺鳥バイなど、各自、その印象を與へずには置かなかつた。赤味がかつた、短く剪んだ鬚髯と、少々平べつた過ぎて上唇の上に胡坐をかいてゐる鼻とを持つ偉大な體の、少々肥満し過ぎたこの男は——尤もこの男の祖父といふのは誰も、そして彼自身も知らなかつたし、父親は金持と結婚はしたものの、それには兎角の噂があつたため、社交界にはまだ殆ど顔出しさへも出来なかつたけれど——彼の代になつてからはフーノイス家やメルレンドルプ家と姻戚關係を結び、自分の名を是等の五つか六つの名望ある家柄の名と列べて對等の地位にしたほどの遺手であつて、確かにこの市に於ける注目すべき、そして畏敬すべき存在ではあつた。彼の人格の新奇なるが爲めに魅惑的な點は、即ち、彼を有名にし、衆目の視る所に彼に指導者の地位を與へたものは、その自由で寛大な人柄

であつた。彼が金を儲けたり、之を出したりする、奔放で太つ腹な遣り口は同じこの市の實業家連の片意地で、粘り強くて、厳しい因習となつてゐる主義方針に指導されてゐる働き振りとは、また別なものであつた。この男は傳統と敬虔の壓制的な桎梏から放たれて自由に、彼独自の立場を固守してゐた、そしてあらゆる古風なものには彼にとつて縁遠かつた。それで彼は、古い、馬鹿げた場所塞ぎをして建てられ、その駄々広い石疊の鋪床を白漆塗の柱廊が圍んでゐる貴族的邸宅のどれにも住まはなかつた。ザンド通り——本町通りの南の續きである——の彼の家は、質素な油入漆喰の正面といひ、實用的な間取の具合といひ、さては立派で、粹で、快適な設備を持つてゐる點等々で、現代的であり、總ての固苦しい不自然な様式から脱してゐた。なほ、彼はこの彼の邸宅へ、まだつい少し前のこと、彼が催した相當大規模の夜會の一つに際して、市立劇場に契約中の一人の女歌手を招聘し、食後賓客、この中には彼の弟で美術好きの藝術家氣取りの法律家も交つてゐたが、その賓客の前で彼女に歌を唄はせ、この婦人に素晴らしい謝禮を贈つた。彼は中世の記念物の修理と保存のために可成りの金額を支

出す事を市民會で協賛するやうな男ではなかつた。然し彼がその住居と事務所とに瓦斯燈をつけた率先者であること、全市中で斷然最初の人であつたことは事實だつた。若し、コンズル・ハーゲンシュトリームが何等かの傳統に生きてゐたとしたならば、それは確かに彼の父、即ち老ヒンリヒ・ハーゲンシュトリームから譲り受けた、無條件的な、進取的な、寛容な、そして偏見に捉はれない物の考へ方であつて、彼が世間から享けた感嘆も、それが根柢になつてゐたのであつた。

トーマス・ブッデンプロオクの優越權は、また別趣のものであつた。彼は嘗に彼自身のみではなかつた。世人は彼の中に猶ほ彼の父、祖父及び曾祖父の不朽の人格を敬慕した。それで彼は、彼自身の商賣上並びに社會上の成功を除いても、百年に亙る市民的名譽を擔ふ者であつた。勿論、彼がその名譽を代表し利用した、氣輕で、趣味があつて、人に好かれずには置かない遣り口は、恐らく最も重要なものではあつたけれど、彼を有名にしたものは、博識な市民仲間の間にあつてさへ、全く異常に發達した儀容上の教養であつて、これが發揮せられた場合、常に尊敬と、同様に、驚異

の念を惹き起したのであつた。

毎木曜日、ブッデンプロオク家では家族團樂の席上、いよ／＼近づいて來た選舉に就いて、談話は、コンズルの面前で、多くは唯簡單な、殆ど無關心な思付といつた風の形式で交はされた。その折にはコンズル老夫人は憤み深く、彼女の明るい眸を逸らせた。然しベルマネーデル夫人は、少しく彼女の憲法に關する驚嘆すべき知識を自慢氣に振り廻はさずには居られなかつた。彼女は憲法の中の元老會議員の選舉に關する限りの法規は、彼女が一年前に離婚の條項を研究した時のやうに詳しく研究したのであつた。それから彼女は選舉室、選舉權を有する市民、投票用紙等に就いて語り、考へ得られるだけの偶發的事件を吟味し、選舉人から爲されなければならない儀式張つた宣誓を文字通り、す／＼と引用し、憲法に従ひ個々の選舉室によつて、候補者名簿にその名を登録した人々に對して行はれる「自由討議」に就いて語り、そして、切實な希望として、ヘルマン・ハーゲンシュトリームの人物の「自由討議」に参加出来れば好いと述べた。一瞬の後彼女は身を屈めて兄の砂糖漬果物皿の上の杏の種を數へ始めた「貴人——非人——ドク

トル——バストル——議員さん！」と語呂合せをして彼女は不足した核を自分のナイフの尖端でその小さな果物皿の上へ抛り上げた……然し、食後になつて彼女は我慢がしきれないで、コンズルの腕を執つて傍の窓の出張りの中へ引き入れた。

「ねえ、トム！ 若し、あなたがさうおなりになつたら……家の紋章が議事堂の戰爭の間に出れば……妾は嬉しくつて死んぢまふでせう！ 妾は、ひつくり返つたまゝ死んでるでせう、見てみて下さい！」

「さうかい、トオニー、だが、お願ひだから、もつと落着いて、品を失はないやうにしてお呉れ！ お前は、平生はそんな風ぢやないぢやないか？ 私は、ヘンニング・クルツのやうに黙け廻つてゐるかい？ それに、私達は『ゼナートル』の稱號がなくなつたつて、相當なものだ……さうして、どちらに轉じたつて、お前は恐らく生きてゝ呉れるだらう。」

さて世間では、煽動、協議、意見の鬭争がその行進を續けてゐた。洒落者のコンズル・ペーテル・デルマンは、やつてゐる商賣も今は名義だけで門前雀羅を張り、二十七歳

になる娘があつても、相續させる財産は疾くの昔に喰つて終つてゐたが、この行進に参加して、トーマス・ブッデンプロオクが振舞つた正餐會と、これまたヘルマン・ハーゲンシュトリームが催した正餐會に列して、その度毎に、どちらの主人をも、騒々しい胴間聲で「ゼナートルさん」と呼んだ。ジーギスムンド・ゴッシユ、即ち老仲買人のゴッシユの方は、吼えるライオンのやうに歩き廻つて、コンズル・ブッデンプロオクに投票しようと思つてゐない有権者を文句なしにぎょうぎょう言はず役目を引受けてゐた。

「コンズル・ブッデンプロオクは、皆さん……あゝ、何といふ御仁でありませう！ 私はあのお方のお父さんが、過ぐる四十八年に鎖を解かれた賤民どもの激昂を一言で手懐けてしまはれたときに、立會つて居たのでありまして……若し、世の中に正義といふものがあるといたしますれば、あの方のお父さん、それからお父さんのお父さんは疾くの昔に元老會に入られたに違ひなかつたでありませう……」

然しものとく、ゴッシユ氏の心の裡にかゝる熱情の焰を煽りたてたものは、コンズル・ブッデンプロオク自身の人物ではなく、寧ろアルノルトセン家出の若いコンズル夫人であ

行爲をこの夫人のために敢然犯すといふやうな見込みもなかつた！ また、この世の中の退屈な慣習は、殺人とか犯罪とか血腥い策略によつてこの夫人を王座に祭り上げることを彼に許さなかつた。ただ彼が夫人のために出来る仕事はと言へば、彼が自棄に尊敬してゐる彼女の良人の選挙のために一票を投ずることゝ、それから彼女に、多分、將來いつか、ローベ・デ・ペーガの戯曲全部の翻譯を獻げることより他には何もなかつた。

四

元老會に於て生じた空位は總て四週間以内に再び任命されなければならぬ、是は憲法の規定する所である。ジェームス・メルレンドルフが死んで以來三週間は経過した。そして、いよいよ選挙日が到来したのである。それは二月も末の或る雪融けの日であつた。

本町通りの議事堂の前では——透し入りの珪礫質煉瓦の正面、灰白色の空に聳えてゐる大小幾多の尖塔、前面に押し並んだ圓柱の上に坐つた、屋根のある階段形昇降口、廣場と其處の噴水が一目に見渡せる尖頭のあるアーケードな

つた。そのくせ、仲買人は今日まで彼女と一言でも言葉を交はしたことはないのだ。彼は富裕な商人の部類には入つてゐなかつたし、彼等の食卓で食事をとつたこともなかつたし、また、彼等と交際をしてはゐなかつた。然し、既に述べた通り、ゲルダ・ブッデンプロオクがこの市に姿を現はすや否や、絶えず渴望的に、何か異常ものを追ひ覓めてゐる陰鬱な仲買人の眼は彼女を忽ちに探し出した。やがて彼は確かな本能でこの女性こそ彼の悶々たる生活に一掬の清新味を添へるに適したものであることを認め、まだ、彼の名前さへも殆ど識らない彼女に奴隷として身も魂も捧げて奉仕した。爾來彼は思念の中で、まだ、誰からも紹介されたことのないこの神經質な、極めて控へ目の婦人の周圍をぐるぐると、恰も虎が猛獸使ひの周圍を廻るやうに廻つてゐた——彼が路上で逢つた彼女の前で、彼女としては思ひも掛けぬことながら、彼のジュスイット僧型の帽子を脱いだときと同じの、あのむつつりした表情と悪賢く卑下した態度で……それでも、凡庸なこの世の中では、僵僕で、陰鬱で、血の氣もなく外套にくるまつた彼が、惡魔的な冷淡さでやつてのけたかも知れないやうな身の毛もよだつ慘虐な

どを持つた、その議事堂の前では晝下りの午後一時といふに群衆が締め合つてゐる。彼等は、足の下ですつかり融けてゆく街路の汚れて水つぽい雪の中に、じつと立ちつくしてゐる、互に相手を眺めては、また、元通り正面を見返り、首を伸ばしてゐる。何となれば、彼處の、あの玄關の背後の、十四脚の肘掛椅子が半圓形に並んでゐる議場の中では、まだ、この時刻になるまで元老會と市民會の議員から成立つてゐる選挙會が各選挙室からの推薦を待ち焦れてゐるからである……

事件は長引いた。各選挙室の討論は、こゝ暫くは落着いたさうな氣配も見えず、戦闘は正に酣であつて、議場内の會衆に今に至る迄一度も同一の人物が推されなかつたらしい。といふのは、若しさういつた人物があれば市長から直ちに當選した者として公表される筈だからである……これは不思議だ！ それが何處から来るものか、また何處で、どんな風に、でつち上げられるものか、誰も知らない。然し、色んな風評が大玄關から街路に洩れて來ては、擴がつて行くのだ。彼處の大玄關の内にはカスペルゼン氏、二人の使丁中年上の方で「官吏」とより他には決して自稱し

ない男だが、そのカスベルゼン氏が立つてゐて、彼が見聞きすることを、齒を閉ぢ、眼をそむけて口の片隅から外部に向つて報告してゐるのであらうか。今のは、會議室に於ける各種の推薦が到着したこと、そして三つの選挙室のどれからも別々の人間が、即ち、ハーゲンシュトレーム、ブッデンプロオク、キステンマールが推されたといふのだ。神よ、願はくば、今や、少くとも、投票紙使用の無記名投票による普通選挙の結果が絶対多数となりませうに！ 暖かいオウアーシューズを着けてゐないものは脚を上げて足踏みをはじめてゐる、足の先が寒氣のために痛むからだ。

此處に立つて、待つてゐる人達は市民のあらゆる階級を網羅してゐる。両手を洋袴の廣く深いポケットに突込み、文身をした頸をぬつと出した船乗や、上張りフレイズと黒い光澤ツヤツヤの麻の半股引を着けた、無類に愚直な顔付の穀物運搬人の姿が見える。馬方連は山と積まれた穀物袋を傳つて降りて来て、鞭を手にしたまゝ、選挙の結果を待ち焦れてゐる。頸巻と前掛と厚い縞の上衣に小さな白い縁無帽を後頭部に載せ、露あはの腕に大きな手籠を下げた下女、麥藁帽を被つた魚賣や野菜賣の女ども、それから和蘭帽に短い上衣を着て、

五色の縲ぬいをした胸着から褶のある長い白い袖を覗かせてゐる綺麗な花賣娘までが四五人……是等の人々の間に市民、帽子無しで出て来て、各自の意見を交換してゐる近所の商店の主人、若い、身形みなりのよい商人、父親の、或は父親の友人の誰かの帳場で三四年の年期を仕上げる息子、背囊と書物包を持つた學童などが交つてゐる……

硬い船乗袴の、嚙煙草を噛んでゐる二人の労働者の背後に一人の婦人が頗る興奮しながらこの二人の逞しい男の肩越しに議事堂が見られるやうに頭をあちこちと向けて立つてゐる。彼女は長い、褐色の毛皮で縁取をした一種の夜間ナイト外套を内側から両手で掻き合はせて羽織り、顔はすつかり厚い褐色の面紗フェイスで裏んでゐる。彼女の護謨靴は絶間なく雪融け水の中を小刻みに動き廻つてゐる……

「手前の旦那のクルツさんはきつと、今度も落ちるだ。」と労働者の一人が他の一人に言ふ。

「いゝや、デースバルテル、そんなことあ、言はねえでも解つてる。みんなの衆はハーゲンシュトレームやキステンマールやブッデンプロオクに入れるだ。」

「そりや、さうだよ。しかし、三人のうちで、誰が勝つか

それが聞き所だ。」

「さうよ、手前誰が勝つか、まあ言つてみる。」

「なあ、おい、僕の考へでは、まあ、ハーゲンシュトレームだらうぜ。」

「やい、クラウクシェーテル……何をべら棒な。」

それから彼は嚙煙草を人混で弓形に吐き飛ばすことが出来るないので、自分の足許へ吐き棄て、両手で洋袴を一段高く革帯の下で引張り上げて言葉を續けた——

「ハーゲンシュトレームか、あいつは、お前大喰ひで、鼻で息が出来ねえつて程の肥つちよだ……僕とこのクルツ旦那が、また駄目だとすると、僕ならブッデンプロオクに入れるなあ、ありやあ、偉いもんだ……」

「成程お前はさう言ふけど、ハーゲンシュトレームはずつと大金持だあな……」

「そんなことは、お前、大したこつちやねえや、そんなことは、お前、問題にならねえよ。」

「それに、ブッデンプロオクはいつでもお前、袖口や絹のネクタイやびんとした髭をして、ひどくお上品振つてやがる……あの男が歩いてゐるところを見たかえ？ 鳥みてえに

びよこ／＼歩いて行きやがる……」

「とんちきめ！ そんな事こそ問題にやらねえ。」

「あれにやあ、お前、嫁にや行つたが、二遍とも婿と別れて出戻つた妹があるさうぢやねえか。」

……夜間外套の婦人は身を顛はす……

「あいつあ妙な話だ。しかし、俺達は全く知らねえこつた。クンゼルさんだつて、どうにもしやうがねえぢやねえか？」

ねえ、さうでせう？！ と面紗の婦人は考へる、両手をマントの下で握りしめながら……ねえ、さうでせう？ 嗚呼、有難い！

「それになあ、」とブッデンプロオクの肩を持つてゐる男は附け加へる、「それになあ、市長のエーヴェルディクも、あれの息子の名付親になつたんだ。それも幾らか勘定に入らうぜ、言つて置くがな……」

ねえ、さうでせう？ と婦人は考へる。さうだつた、有難いことに、あれが利いたのだ！……彼女は急にびくりと全身を顛はす。新しい風評が外部へ洩れて、稻妻形に後方に向つて走り、彼女の耳に達する。普通選挙は何等の決定をも齎らさなかつた。得票の最も少かつたエードゥアル

ド・キステンマーケルは除外された。ハーゲンシュトリームとブッデンプロオク両者の競争は更に續く。市民の一人は勿體振つた顔付で、得票が同點となつた場合は、多數決に依つて孰れかに決定する役を務める五人の「調停委員」を選ぶことが必要となるであらうと述べてゐる……

突如、大支關の眞前にあつて「ハイネ・ゼーハース當選！」と呼ばはる聲がする。

所が、このゼーハースといふのは蒸し麵麩を手車に積んで賣り廻る、年が年中酔拂つてゐる人間なのだ！一同は笑ひ動揺めいて、このおどけ者を見んものと爪尖で背伸びをする。面紗の婦人も一瞬間肩を揺つて神經質に笑ひ出す。然し、直ちに——今は冗談を言つてゐる時であらうか？……といつた素振り、腹立たしさうに氣を取り直し、再び二人の勞働者の間を通して彼方の議事堂を熱心に窺ふ。然し同じ瞬間、彼女は兩手をだらりと下げる。夜間外套の前が開く、そして、彼女は兩肩をすぼめ、くつたりと力なく其處に立つてゐる……

ハーゲンシュトリーム！——といふ報告があるのだ、誰もそれが何處から來たのか知らない。それは地から湧いた如

く、天から降つた如く姿を現はし、然も到る處同時なのである。何等の抗議も起らない。事は決定した。ハーゲンシュトリーム——さうだ、彼が今や當選したのだ。もう期待する何ものともない。面紗の婦人は、これを前から知つてゐて宜かつた筈だ。人生とは常にこんなものだ。民衆は今ももう黙つて家に歸つて宜いんだ。彼女は涙が胸の中をこみ上げて來るやうに感じる……

だが、この状態が一秒間續いたか續かないうちに、だし抜けな衝撃、急劇な動揺が人波の間を迂曲る、それは前から後へ移つて行き、前方の人が背後の人へ靠れかゝる一つの推進だ、是と同時に一方、彼處の大支關の奥で何か薄赤いものがきらめく……赤い上衣の二人の使丁、カスベルゼンとウーレフェルトが三角帽、白の騎馬洋袴、黄色の折返し長靴、飾刀等で盛裝して、並んで立ち現はれ、後すざりをする人群の間を縫つて進んで行く。

彼等は運命の如く、嚴かに、黙つて、むつつりして、左右を顧みることなく、眼を俯伏せて進んで行く……そして、容赦なく、決然として、彼等に告知せられた選挙の結果が指示した方向を取るのだ。だが、それはザンド通りの方向

ではない、彼等は右手の方、本町通りをだらりと下つて行くではないか！

面紗の婦人は自分の眼を信用しない、然し彼女の周囲でも人は彼女と同じやうにそれを見てゐるのだ。人々は同じ方向を取つて、使丁の後からついて行く、彼等は互に言ひ合つてゐる——「違ふぞ、違ふぞ、ブッデンプロオクだ！ハーゲンシュトリームぢやない！……」そして、もう大支關

からは色々な紳士達が興奮した聲で語り合ひながら、ぞろぞろ姿を現はし、右手へ曲つて、本町通りを慌しい歩調で下りて行く、祝賀の先頭を切るためだ。

そこで、婦人は夜間外套を引き締めて、其處から驅け出す。彼女の走る様は、元來婦人の走る走り方ではない。彼女の面紗は風に流れてそのほてつた顔を現はす。然し、そんなことはどうでも宜い。そして、假令、彼女の毛皮で縁取つた套靴の一つが、水つばい雪の中で絶えず脱げさうになつて、意地悪く彼女の走るのを邪魔しても、彼女は總ての人を追ひ越すのだ。彼女は最先にベッケルグルーベの街角の家を驅けつけて、車寄せの處で自棄に鈴を鳴らし、扉を開ける小間使に向つて——「遣つて來るよ、カトッリ

ン、遣つて來るよ！」と叫び聲を残して、階段を一目散に駆け上がり、階上の居間の中へ飛び込むと、其處では、實際少し蒼褪めた彼女の兄が新聞を傍らに置き、彼女に向つて何か拒むやうな手振りをする……彼女は彼を掻き抱いて、また繰返すのである——「遣つて來ますよ、トム、やつて來ますよ！貴方が當選したんです、そして、ハーゲンシュトリームが落ちたんです！」

×

是は金曜日のことであつた。次の日には、もう、ゼナートル・ブッデンプロオクは議事場に於て故ジエームス・メルレンドルブの座席の前に起立し參集した長老と市民代表の面前で次の宣誓を行つた——「余は余の官職を忠實に司掌し、國家の安寧に全力を致し、國憲を忠實に遵奉し、公財を廉直に管理し、余の職權行使、特にまた選挙全般に際しては、自己の利益並びに親族、知己を顧慮することなきを期す。余は國法を執行し、而て貧富を論ぜず、各人に對し公平ならんことを期す。余はまた緘黙を要する總てのものに關して緘黙し、特に秘密を保持すべく余に命ぜらるゝもの、秘密を保持することを期す。この誓約の實證に神明の

加護あらんことを！」

五

我々の願望と企圖は我々の神経の、言葉では規定し難い或る種の欲求から發現するものである。世にトーマス・ブッデンプロオクの「虚榮」と言ひ囃されたもの、即ち彼が自己の外見に拂つた細慮、自己の身のまほりを飾つた奢侈は、その種のものとは事實根本的に異なるものであつた。それは元來一個の行動的人間として、頭の天邊から足の爪先まで、何處一つとして點の打ちどころがないといふ自覺、これが彼に威嚴を與へてゐるのであるが、この自覺を失ふまゝいと努力にほかならなかつた。彼の天分と力量とに對する彼自身の、及び世人の要求は段々と増大した。彼は私的と公的の義務を無闇に背負はされた。「役員任命」即ち市元老會の職務の割當に際して、彼には主管部門として租稅事務が委託せられた。しかし、そのほかに鐵道、關稅及びその他の政務も彼を煩はした上に、當選以來彼が議長となつた管理委員及び監督委員の無數の會議に於て、遙か年長者の神經過敏を絶えず顧慮し、表面は彼等の老巧な經驗に

服するかに見せかけて、然も、實權を掌中に握つてゐるために、彼のある限りの用意周到と愛嬌とそして圓轉滑脱とが必要だつたのである。同時に不思議な事が現はれて彼の「虚榮」即ちこの肉體的に氣分を爽かにし、更新させ、日に數度となく衣服を着更へ、元氣を恢復し、そして、朝の爽快さに歸らうとする欲求が著しく増大した事實が認められたのであるが、それは至極單純に、假令トーマス・ブッデンプロオクが漸く三十七歳になつたばかりであるにもせよ、彼の活氣の減衰と、比較的速かな精力の消耗とを意味したのであつた……

善良なドクトル・グラボオがもう少し休養を取るやうに懇めたときに、彼は答へた——「いや、先生！ まだそれほどでもありませんよ」彼のさういつた意味は、功成り名遂げて後は、安樂に満喫することが出来るであらう或る身分を、多分將來いつか獲得するまでには、まだ見通しのつかないほど多くの仕事を遂行しなければならぬと云ふことだつた。彼はかゝる身分になれるとは殆ど信じてゐなかつた。何ものか彼を鞭打ち、激勵して、一刻の安靜をも許さなかつた。彼が、例へば食後など、新聞でも持つて休

息してゐるやうに見えたときでも、彼は一種緩慢な熱情を以て、上髭のびんとはねた尖端を捻り、そして、蒼白い額には青筋を立てながら、彼の頭の中では無數の計畫が入亂れて活動してゐたのだつた。所で、彼の眞劍さは商賣上の掛引、或は公務上の演説の腹案を練る場合でも、肌着類を今度こそは手短かに全部取更へてしまはう、撓くともこれだけは當分の間立派にきちんとして置くために——と目論む場合でも別に變りはなかつたのだつた！

このやうな準備と修理とは彼に一時的には或る種の満足と安心とを與へたので、彼はそれ等に要する支出を少しも惜まなかつた。思ふに、彼の取引は近年になつて嘗ての彼の祖父の時代程の頗る好調を續けてゐたからである。店の名は單に市内ばかりでなく、遠隔の地にも響いてゐた。そして、公共團體の内部では彼の名望はなほ依然として高まつて行つた。誰でも、或は嫉ましさに、或は喜びの心を寄せて、彼の力量と手腕とを認めない者はなかつたが、一方彼自身は整然と樂々事を運ばうと徒らに眺くばかりだつた。といふのは計畫的な想像を恣にしなから、その蔭では絶えず私に自分の時代は過ぎ去つたと云ふ絶望的の感を

味つてゐたからである。

それで、ゼナートル・ブッデンプロオクがこの六十三年の夏、そこいらを歩き廻つて、安莊な新家屋を建築しようといふ計畫に就て熟考したことは決して驕傲ではなかつた。幸福な者はその場に止まつてゐる。彼の落着きのないことが彼を驅つてこのやうな計畫を樹てさせたのだ。然し、彼の市民仲間はこの企畫を所謂彼の「虚榮」の所爲にするこゝとが出来たであらう。事實またそれは虚榮であつたのである。

新築家屋、外部生活の根本的な刷新、取りかたづけ、轉居、新装と同時にあらゆる古きものと餘計なもの、過ぎ去つた年のすべての殘滓からの離脱——かういつた想念が、清淨、新鮮、潑刺、純潔、強壯の感情を彼に與へた……また、彼は是等の總てを十分必要としたに違ひなかつた。何となれば彼は熱心に是等のものを捉へようとしてゐたし、それにもう或る一定の場所に目をつけてゐたからである。

それはフィッセルグルーベの下の方に在る可成り廣大な地所であつた。其處に一軒の古色蒼然とした、荒れ果てた家屋が賣物に出てゐた。所有者は高齢の未婚婦人で、世間

から疾くに忘れられた或る家族の残存者として、全く獨りぼつちでその家に住んでゐたが、少し前に物故したのであつた。この場所にゼナートルは彼の家を新築しようと思つた。それで、彼は港へ出掛けて行く折には、通りすがりに幾度も、この場所を検分した。近隣は感じが好かつた——破風のある上品な市民の家屋が並んでゐた。彼等のうちで一番目立たないのは眞向の家で、地階がさうやかな花屋になつてゐる狭隘な建物であつた。

彼はこの企てに懸命に没頭した。費用の大體の見積もつた。そして、大體確定した金額は決して些少なものではなかつたけれども、彼はそれを、大して頭を悩まさずに支拂ふことが出来ると思つた。然しそれでも彼はこのこと全體が若しかして無益の業であるかも知れないと考へたとき、流石に蒼くなつた。そして現在の我が家が自分や妻子や僕婢等に對して實は十分廣いんだと認めた。然し、彼の半ば意識せられた欲求は彌々烈しくなつてきた。そして、外部から彼の計畫を鞏固にし、是認して貰ひたいといふ願望に驅られて、彼は先づ妹にその胸中を打明けた。

「要するに、トオニー、お前はこの問題をどう考へるね！」

湯殿へ態々螺旋階段をつけたのは一寸乙だが、要するに全體はぼろ家に過ぎないよ。これぢやあ體面に係るだらう、どうだね？ それに、今ではお前のお蔭でゼナートルにもなつたことだし……一言で言へば——私はさうすべきだらうか……？」

とんでもない、ベルマネーデル夫人に言はずれば、彼はどんな事でもすべきだつた！ 夫人は眞剣な感激に充された。彼女は腕を胸の上に組み、肩をいくらか上げ氣味に、頭を反せて部屋をあちこちと歩いた。

「さうですとも、トム！ 全くさうですとも！ 異存なんか、ちつともありませんわ、おまけに十萬ターレルも持つてゐらつたアルノルトセン家のお嬢さんをお貰ひなすつたんだし……それにあたし、貴方から眞先に打明けて戴いて嬉しいの、ほんとに有難うね！……どうせやる位ならお上品に、ね、トム、ようござんすか……！」

「むろん、私だつてさう思つてゐるよ。その點には多少金をつかつてみるつもりだ。フォークトにやらせるつもりだが、お前と一緒に設計圖を見るのが今から楽しみだよ。フォークトは却々趣味もあるし……！」

トーマスが求めて得た第二の同意はゲルダのそれであつた。彼女はこの計畫を徹頭徹尾賞めちぎつた。引越の混雑は愉快なものではないであらう、然し、音響の具合の良い大きな音楽室を作るといふ期待は彼女の氣持を幸福にした。また、老コンズル夫人の方はといへば、彼女は喜んで即座に今回の建築を、満足して神へ感謝しながら經驗して來た、これまでの色々な幸福な出來事の論理的歸結だと考へたのだつた。相續の孫の誕生とコンズルの市元老會員當選以來といふもの、彼女の母親としての誇は前々よりもなほ一層明らかさまに現はれて來た。彼女は「伴のゼナートル」と呼ぶ一種の癖があつて、それは本町通りのブッデンプロオク家の婦人達を極度に苛々させたものである。

段々老けて行くこの娘達にとつてトーマスの社會的生活がなした華々しい飛躍から目をそらす材料が實際少な過ぎた。木曜日に憐れなクロチルデを調弄ふことはさして満足齋らさなかつた。また、クリスチャン——彼は舊の社主であるリチャードスンの幹旋によつて倫敦で或る地位を得、彼處からつい最近ブーフォーゲル嬢を妻に迎へたいといふ馬鹿げた希望を打電して來て、コンズル夫人から手厳し

く刎ねつけられたのであるが……、今では全くヤイコブ・クレーゲルの位置に落ちてしまつたクリスチャンに就てはもう一件落着だつた。それで、今度はコンズル夫人やベルマネーデル夫人のちよつとした弱點が少々埋合せの役を仰せ付けられた、例へば、談話を髪の結び方の上に持つて行つたりなどして、といふのは、コンズル夫人は……凡そ神様から悟性を授かつた人間ならば確かに誰でも、就中ブッデンプロオクの婦人達ならばこの老夫人の頭巾の下の、昔のままの赤味がかつた褐色の顛頂がずつと前から決して「あたしの」髪と呼ばれ得ないであらうといふことを話し合つたに違ひないのに……彼女はいつも優しい顔付をして、あたしは「あたしの」髪を撫付けるなどと言ふことが出來たからである。然し、従姉妹のトオニーをうまく煽つて、彼女の是迄の生活に憎むべき仕打で影響を與へた人物に就いて少し許り喋舌らせることは、なほ一層骨折甲斐があつた。

泣き蟲のトリーシユケー、グリュンリヒ！ ベルマネーデル！ ハーゲンシュトレーム一家！……トオニーが興奮した場合、恰も憎惡の喇叭の多くの小刻みな音のやうに、兩肩をいくらか聳かして空中に吹き鳴らした是等の名前は、ゴ

トホルト伯父の娘達の耳には、まことに氣持よく響いた。そのほかに、彼女等は幼いヨハンが歩くことと話すことを覚えるのが吃驚するほどの、臭いといふことをお互に裏みかくさなかつた——また、そのことを黙つてゐるといふ責任を決して引き受けはしなかつた……それは道理のことであつた。ハノオ——これはゼナートル・ブッデンブロオク夫人が息子につけた呼名であつたが——ハノオは家族の者全部の名前を可成り正確に呼ぶことが出来るやうになつた時でも、まだ相變らずフリーデリーケとヘンリエッテとブーフイといふ名を聽手にわかるやうに發音することは出来なかつた。歩くことに就いて言ふと、生後一年三ヶ月の現在、彼はまだ手離しで歩けなかつた。それで、ブッデンブロオクの婦人達が頭を絶望的に振つて、この兒は一生生涯れもつかぬ啞と跛で終るだらうと明らさまに言つたのは、その當時のことであつた。

彼女等は後になつてこの悲しい豫言を誤謬と認めて差支へないことになつた。然し、誰もハノオの發育が少し遅れてゐたことは否定しなかつた、彼は生れて間もない頃早くも困難な闘ひに打勝たねばならなかつたし、彼の周囲の者

を絶えず憂慮させて來たのだ。彼は、靜かな、元氣の無い兒としてこの世に生れ落ちたが、受洗後間もなく、僅か三日ばかり打ち續いた下痢と吐瀉の發作は、骨折りの結果漸く活動するやうになつた小さい心臓を殆ど最終的に休止させるところまで行つた。けれど彼は無事に生命を取り止めた、それで、善良なドクトル・グラボオは今度は榮養と手當の上に細かい注意を拂つて、近い生齒期の危機に備へる豫防手段を講じて呉れた。然しながら、最初の白い尖端が齒齦から出始めるや否や、またもや痙攣が起つて、それが次第に劇しくなり、戰慄を催させる程甚しいのが二三回反復した。再びまたこの老醫師が、兩親にたゞもう無言で握手するといふ場面にまで來たのである。……子供は衰弱し切つて横たはつてゐた、そして、濃い陰影に包まれた眼の虚ろに据つた横目は來るべき脳症を意味してゐた。最後が殆ど願はしくさへ思はれた。

然し、ハノオはやがて稍々力を恢復して、彼の眼は再び物を見分け始めた。辛じて克服した苦勞が、言葉や歩行の進歩を遅くしたけれども、最早今のところ恐るべき直接の危険はなくなつた。

ハノオは體つきが花車で、年齢の割に背は可成り高かつた。彼の淡褐色の、頗る柔かい頭髮はこの頃になつて非常に迅く伸び始め、間もなく殆ど目立たぬ程に波打つて、彼の襟の付いた前掛様の子供服の肩の上に垂れ下つた。もう彼の外貌には血族的相似が十分認められる位に現はれ始めた。最初から彼は全く明白にブッデンブロオク家の手——廣い、少々短か過ぎる、然しすんなりとした手を持つてゐた、また、彼の鼻は、まさしく彼の父親と曾祖父の鼻であつた、たゞ、鼻鬚だけはもつと柔いまゝでゐるやうに思はれたが、然し、顔の細長い下半面全部はブッデンブロオク家のものでも、クレイゲル家のものでもなく、母方の家のものであつた。——とりわけ、はやくから——もう今から——悲しさうに、だが同時に不安さうに結ばれ勝ちであつた彼の口もとが……この表情には後になつて、青味がゝつた陰影を持つ彼特有の黄褐色の眼の輝きがだん／＼ふさはしくなつて來るのだつた……

彼の父親が彼に注いだ控へ目な柔和に充ちた眼差と、彼の母親が彼の衣服と、養育の上に拂つた細かい心盡しの下で、叔母のアントオニエから寵愛され、コンズル夫人やユス

トウス伯父から贈られた騎馬人形や獨樂を玩具にして——彼は生活し始めた、そして、彼の乗つた綺麗で小さな乳母車が街に現はれたときには、人々は興味と期待とをもつて彼を見送るのだつた。然し、尊敬すべき保姆のマダム・デヒューに就いて言へば、彼女は最初からずつとこの役を勤めて來たのであるが、確定的な事實として、新築の邸宅へはもう移つて行かないで、イーダ・ユングマンが彼女の代りに入ることになつてゐた。一方コンズル夫人は誰か代りの人手を探さずであつた。

ゼナートル・ブッデンブロオクは彼の計畫を實現した。フイシエルグルーベの地所の買入れは何等面倒なことではなかつた。そして、本町通りの家屋は、仲買人のゴッシュがいきり立つて、即座に引受けると言つてゐたが、シユテファン・キステンマーケル氏——今では家族も殖え、それに彼の兄弟と一緒になつて赤葡萄酒で好い儲をした——氏が直接に買取ることになつた。フォークト氏は建築を請負つた。そして、間もなくもう例の木曜日には家族團樂の中で、一同の者はフォークト氏の鮮かな設計圖を展げて、建物の正面を豫め觀ることが出來た、——それは見事な素煉瓦建築で、上

階の出張りを支へてゐる砂岩の女體の柱と平屋根とをもつてゐた。此の屋根に就いてクロチルデは間ののびた優しい口振りでこの屋根の上では午後の珈琲が飲めるであらうと述べた……メング通りの家の最下階の部屋々々に就いてさへ、それ等の部屋はゼナートルが自分の事務所もフィッシュルグルーベに移さうと考へてゐたので、臆て明くことにならざるであらうが、市の火災保險會社がそれ等を營業所として借受けることに腹を決めてゐることが解かつてゐたので、總ては迅速に、うまく片がついたのであつた。

秋が來た。灰色の壁がどたくと切り崩された。そして、廣々とした地下室の上に、冬が來て、また再び影を潜めてゆく間に、トーマス・ブッデンプロオクの新邸宅が建て上げられた。市中にこれ以上人の心を惹いた話題はなかつた！飛び切りのものになつた、界限切つての美しい邸が出來上つた！一體ハンブルクにだつて、これより美しい建物があつたであらうか？……けれども、恐ろしくお金がかゝつたに相違ない、そして、老コンズルなら、こんな思ひ切つた事はきつとしなかつたらう……近隣の住人、破風のあつた家屋の市民達は、窓際に突立つて、足場の上の職人達の

仕事振りを打ち眺め、建物が高くなつてゆくのを喜んだ。そして棟上の日取りをきめようと試みたりした。

その棟上の日が到來した。そしてうんと儀式張つた形式で行はれた。屋上の、あの平屋根の上では一人の老齡の棟梁が演説をした。それが済むと彼は三鞭酒の饅を一本肩越しに投げた。その時他方では、祝旗の間で薔薇や綠葉や華やかなりボンでつくられた素敵に大きな棟上の花環が重さうに風に揺いでゐた。それから近所の料理屋で、細長い食卓についた職人一同に麥酒とサンドウィッチと葉巻の祝宴が與へられた。ゼナートル・ブッデンプロオクは、彼の妻とマダム・デヒューに抱かれた彼の小さな息子を伴つて天井の低い部屋の中で食事をしてゐる人々の列の間を縫つて歩を運んだ。そして、彼に送られた歡呼に對して感謝しながら會釋した。

屋外でハノオは再び乳母車に入れられた。トーマスはゲルダと共に、もう一度あの白い女體の飾像のついた支柱がある赤い正面を仰ぎ視るために、車道を横切つた。車道を越えた向側の、狭い入口と、球莖植物の鉢植を二つ三つ緑のガラス板の上に並べて飾り立て、あつた見窄らしい小つぼ

六

七月初めの或る日曜のこと——ゼナートル・ブッデンプロオクは約一月前から彼の新邸宅に引越してゐたが——ペルマネーデル夫人は、まだ黄昏時、彼女の兄の許に現はれた。彼女はトールワルトゼンの模寫の浮彫を幾つか飾つた、そして、其處から右手にあたつて一つの扉が事務所へ通じてゐる、冷やかな、石疊の玄關を通つて、突當りの車寄せの扉の所で呼鈴を鳴らした。此の扉は料理場から護謨の毬を壓して開くことが出來た。それから彼女は本階段の一番下の所の、チブルチウスの贈物の籠が立つてゐる廣い上り口で、下僕のアントンから、ゼナートルはまだ執務中であるといふことを聞いた。

「さう」彼女は言つた、「有難う、アントン、でも、あたし、兄さんのところへ行つてみるわ。」

然し、彼女はその前に事務所の入口の側を少し許り右の方へ通り過ぎて、彼女の頭上に巨大な階廊が開いてゐた所へ歩を運んだ。此の階廊は二階では鑄鐵の階段の欄干の連續から成つてゐたが、三階の高い所では白と金の廣い柱廊

けな飾窓とを持つた、さやかな花屋の前には、この店の持主の、ブロンドの大男で、毛織のジャケットを着たイヴェルゼンが、これは、ずつと瘦せてゐて、色の淺黒い南國的なタイプの顔をした彼の妻と並んで立つてゐた。彼女は、片方の手で四五歳の男の子の手を取り、他方の手では、もつと小さな子供が睡つてゐた小型の乳母車をゆつくり押しつ戻しつしてゐたが、明かにまたお目出度に近い様子だつた。イヴェルゼンは不器用な恰好で丁寧に腰を曲げて、御辭儀をした、然し、彼の妻は乳母車をあちこちと動かす手を休めないで、その黒い切目長の眼で、良人と腕を組んで彼女の方へやつて來たゼナートル夫人を、冷靜に注意深く觀察した。トーマスは立止つて洋杖を上げて棟上の花環を指した。

「あれは、君、大變うまく出來たね、イヴェルゼン！」

「へえ、私の手柄ぢやねえんで、ゼナートル様、ありやあつしの嬢の仕事でさ。」

「ああ、さうか！」とゼナートルは一言さう言つて、ぐいと頭をあげ、一秒時笑顔でちつと親し氣にイヴェルゼンの妻の顔を打ち眺めた。そして彼は一言も言はずに、慇懃に手を振つて別れた。

になつてゐた。そして「天窗」のある眩暈のするやうな高所からは、豪華な、金色燦然と輝くシャンデリヤが垂れ下つてゐた……此の豁然として明朗な、全く一目でそれとブッデンブロオク家の權勢と榮華と勝利とを自分に物語つて呉れる、莊嚴な光景に見とれて、ペルマネーデル夫人は「上品なこと！」と微かに、そして満足して呟いた。が然し、それから彼女の頭には、自分が今悲しい事件で此處にやつて來たのであるといふことが蘇み返つて來た。それで彼女は徐ろに事務所の入口の方へと歩みを轉じた。事務所の中にはトーマスがただ一人居た。彼は窓際の腰掛に腰を下して、一通の手紙を認めてゐた。彼はその淡い眉の一方を釣り上げて、顔をあげた。それから妹に手を差し伸べた。

「今晚は、トオニー、何か好いこともあるのかね？」

「どう致しまして、餘り好い事ぢやないのよ、トム……それはさうと、階廊は大變立派ね……で、貴方は、此處で薄暗がりに腰かけて、ものを書いてゐらつしやるのね。」

「さう……至急の手紙だよ——それで、好いことぢやないんだつて？ 兎に角、何か話があれば少し許り庭の中を歩かうぢやないか、その方が氣持が好いから、お出で。」

ヴァイオリンの緩徐調が顫へながら二階から響いて來た。彼等が鋪床を通り過ぎる時だつた。

「ちよいとお聴きなさいよ！」とペルマネーデル夫人は言つて、一瞬間立ち止まつた……「ゲルダが弾いてるのね、なんて美しいんでせう！ お、この女人は……ゲルダはほんとに、妖精ね！ ハノオは近頃どうして、トム？」

「あれは今ユングマンと晩御飯を喰べてるだらう。どうもいけないよ、歩く方がどうも妙々しく行かないんでね……」

「今にきつと歩けるやうになりますよ、トム、きつとうまく行きませうよ、イーダはあんた方氣に入つて？」

「勿論さ、我々に氣に入らないつて法があるものかね……」

彼等は臺所を右手に見て、石疊の裏支關を抜け、硝子戸を通つて二段ばかり下り、優雅な感じの、芳香を放つてる花園の中へ出て行つた。

「さて、それで？」とゼナートルは訊ねた。

其處は暖かで、靜かであつた。綺麗に仕切りの付けられた數多くの花壇から匂ふ馥郁とした香が、黄昏の空氣の中に立ち昇つてゐた。そして、高い、薄紫色の杜若に取り圍まれた噴水は、宵星が微かな光をちらつかせ始めた小暗い

天空に、びちや／＼と長閑な音を立て、水を噴き上げてゐた。その背景には、兩側に二本の低い方尖柱が立つてゐる小さな上り口の階段が小石を敷いた高臺へ通つてゐた、その上には屋根のない木造の園亭が立つてゐて、下された日除けの中に二三脚の床几が並んでゐた。地所は、左手の方では、塀で隣家の庭から割られ、右手の方では別館の側壁が、上までずつと木の柵で覆はれてゐた、やがては蔦を絡ませることになつてゐた。上り口の階段と園亭のある高臺の兩側には若干のあかすぐりや、すぐりの灌木が植ゑてあつたけれども、たゞ一本だけ大木が、瘤だらけの胡桃の樹が一本左手の塀の所に聳えてゐた。

「話といふのは」とペルマネーデル夫人は、躊躇して答へた、兄妹は砂利道の上をゆつくりと前の廣場を迂回し始めてゐた……「チブルチウスが手紙を寄越したの……」

「クララのことか？」とトーマスは訊ねた……「かい撮んで遠慮なく言つて貰ひたい！」

「さうなの、トム、クララは寝てるの。悪いのですつて。そしてお醫者さんは結核……脳結核ぢやないかつて心配してゐるのですつて……さういふのがあたし辛いんですけれど。」

御覽なさい、是はチブルチウスがあたしに呉れた手紙なの。此の同封の手紙はお母さんに宛てゝあるの。チブルチウスは、それにも同じことが書いてあるんだつて言つてますわ。この手紙は、二人で少しばかり匂はせて置いてから、お母さんに渡してくれつて言ふの。それから、も一つ同封の手紙は矢張りお母さん宛で、クララの手で随分覺束なげに鉛筆で書いてあるの。チブルチウスの話では、クララはこの手紙を書きながら、これがこの世のお別れの手紙だつて、恐ろしいことには私は生きたいといふ氣がちつともないからつて、さう自分で言つたさうですわ。ほんとに、クララは、いつも天國に憧憬れてゐたんですものね……」

ゼナートルは黙したまゝ、兩手を背に、項垂れて、彼女と並んで歩いてゐた。

「あなたは、黙つてるのね、トム……そりや、道理だわ、何とも言ひやうがないのね？ それに今またクリスチャンまで病氣になつてハンブルクで寝てるんですもの……」

事實それはさうであつた。クリスチャンの例の左脇腹の「惱み」が最近倫敦で昂じて來て、あらゆる、より小さな不

快を、その爲めに忘れて了ふやうな、酷い痛みに變つて來た。そこで彼はもうどう切り抜けてよいか解からなくなつて、彼の母親に宛て、自分はお母さんから看病して貰ふために、家に歸らなければならぬといふ文面を送り、倫敦の勤口を放棄して旅立つた。けれどハンブルクへ到着すると直ぐに、彼はベッドにつかねばならなくなつた。醫者は關節痠麻質斯と診斷して、差當り旅行を續けることは不可能であるといふので、クリスチャンをホテルから病院に移させてしまつた。それで彼は病床に横たはつて、彼の看護人に非常に悲しげな手紙を口寫しに書取らせたのであつた：「さうさ」とゼナートルは微かに答へた、「間の悪いときには、厭なことが次々にやつて來るらしい。」

夫人は一瞬間腕をトーマスの肩の周りにかけた。

「だけど、貴方は氣を落しては駄目よ、トム！ まだ／＼そんな事は出來ませんわ！ それより、貴方は元氣を出さなくては……」

「さうだ、確かに、そいつは必要だね！」

「どうした譯なの、トム？……言つて頂戴な、あたしに聞かせて宜いことなら。貴方は一昨日の木曜のお晝過ぎ、ず

うつと、なんだつてあんなに黙つてばかりゐたの？」

「あゝ、……あれは商賣上のことだよ、トオニー。私は裸麥を餘り得をしないで、それも極く小口といふんぢやないんで……いやつまり、大口を大變損をして賣らなければならなかつたんでね……」

「おや、そんなことは始終あるぢやないの、トム！ 今日はその風でも、明日はまた儲かるものよ。そんなことで直ぐに氣分を悪くしちやうなんて……」

「さうぢやないよ、トオニー」彼は頭を振つた。「私の氣分は失敗するから沈むといふ譯ぢやないよ。全く反對だ。私はさう信じてゐる、だから、實際またさうなるんだよ。」

「けど、一體、あなたの氣分はどうしたといふの？」と彼女は驚き呆れて問うた。「私達の考ぢや……貴方は陽氣にしてゐて好い筈だと思ふわ、トム！ クララーは生きてゐるし……何もかも神様の御加護でうまく行くでせう！ それでその他のことつてば？ 此處で私達は貴方の庭を歩き廻つてる、なにもかもこんなに良く匂つてる。彼處にはあなたのお家が、夢で見る様なお家が立つてます。あれと較べたらヘルマン・ハーゲンシュトレームなんか、掘立小屋に住

んでるやうなもんだわ！ これも皆貴方の力で出來たことぢやないの……」

「さう、結構過ぎると云つてもよささうだ、トオニー。といふ意味は、まだ新し過ぎるつてことだ。それが私の心をまだ少し許りかき亂すんだ、だから私を苦しめ、萬事につけて私を妨げる不快な氣分が湧くのかも知れない。私はこの邸のことを非常に楽しみにしてゐたものだ、然しこの前喜びつていふのが實際御多分に洩れず一番好かつたよ。といふのは、好いことはいつでも遅れてやつて來るものだからね、いつでも遅れてね、そいつをもう喜ぶことが出來なくなつた時分にね……」

「もう喜ぶことが出來ないんですつて、トム！ 貴方のやうな若さで！」

「若いとか、年を取つてるとかいふのは、その人の感じやう次第だよ。——それで假に好いことや、待ち望んだことが鈍々と遅れてやつて來るとしても、それは、ありとあらゆるつまらない、邪魔になるやうな、氣持を悪くさせるやうな景品をくつ附けてやつて來るのだ。浮世の塵つていふ奴をね。そんなものは、こちらは想像の中では勘定に入れ

ちやゐなかつたんだ。が、こいつがまた人の心を刺す……刺すものなんだ……」

「さう、それはよく分かつてるわ……然し人の感じやう次第で、若いとか、年老つてるとかつて、トム？」

「さうだよ、トオニー。それは一時的なものかも知れない……氣分の調子外れつていふやうなことはね——確かに。だが、私はこの頃實際の私よりか年取つてゐるやうに感じられるんだ。私には業務上の色々な心配がある、昨日の、ビューヒエン鐵道の取締役會議では、コンズル・ハーゲンシュトレームは私を散々こき下したり、辯駁したりして、一同の笑ひものにしたのだ……このやうなことは、以前の私にならば、起りつこはなかつただらうつて、氣がするんだ。私の手から何ものかが逃げ始めてゐるやうな、そして、私がその逃げて行かうとする、何だか、わからないものを、以前のやうに、確かりともう、今では握りしめてゐないつて、氣がするよ……成功つて一體何だらう？ 一種の神祕的な、名狀し難い力、それから用心と用意……私を繞る人生の動きに、私の單なる存在によつて或る壓力を加へるといふ意識……私の都合の好いやうに人生はどうにでもなるといふ

信念……。幸福と成功は我々の中に宿つてゐるのだ。我々は、それ等を確かりと深く握つてゐなくちやならない。所が、茲で内部の方で何か減退し、弛緩し、衰弱し始めると、直ぐに我々の周囲の總てのものが解放され、抵抗し、叛逆し、我々の勢力から、脱離して行くんだ……。それから、一事が萬事、痛手に痛手が續くんのだ、そして、それでおしまひさ。私は最近になつてよく土耳其の諺を考へるやうになつた、それは、どこかで讀んだもので『家が建てば、死が来る』といふ文句だ。私にはまだ死とまでは云はなくても宜いが、後退りが……衰微が……。最後の始まりが……。お聞きよ、トオニー」と彼は、自分の腕を妹の腕の下に差入れながら言葉を續けた、彼の聲は一層低くなつた。「我々がハノオの洗禮式を擧げたとき、お前は、憶えてゐるかい？あの時、お前は私に『今からでも全く新しい時代が始まるにちがひないつて氣がします』とか言つたね。私には今でもそれが極く明瞭と聞えるのだ。そして、それからお前の言つたことを本當にしても宜いつて氣になつたよ。ゼナートルの選挙が始まつて、それには勝つたし、また此處には家が建つたからな。然しだ、『ゼナートル』といふのも

家といふのも、表面のものだ、所で、私はお前なんぞまだ考へたことのないことを知つてるんだよ、生活と歴史からの出来、表徴とか、象徴とかは往々、實際ではもう疾くにも何もかもがまた下り坂になつた時にやつと現はれるつてことを知つてる。この表面的な表徴は、現はれるまでには時日がかかるものだ、丁度天上の星の光のやうにね。私達はあるが一番輝いてゐるときに、もう光が消えかゝつてゐるのか、消えて了つてゐるのか、分らない……。彼は口を噤んだ、そして、彼等は暫く黙つて歩いた。噴水は静寂の中にびちや／＼と音を立て、胡桃の樹の梢はさらさらと囁いてゐた。それからベルマネーデル夫人は大儀さうに深く息を吸つた、それは噤り泣きのやうに聞こえた。「まあ、なんて悲しいことを貴方は仰言るの、トム！こんな悲しいお話を伺ふのは今日が始めてだわ！ だけど、貴方が御自分の氣持をお打明けになつたのは好いことよ、それで、これからは、こんなこと、何もかも悉皆、今までより樂に忘れられるやうになつてよ。」

ちやいけないんだ。では、クララと牧師から來た同封の手紙二通を私に渡して置いてお呉れ。お前にとつても、私がこの件を引受けて、明日のお晝前、私自身でお母さんに話す方が好いだらう、あの優しいお母さん、けれど、若しも結核だとすれば、諦めなくちやならないね。」

七

「でも、貴女は、私に何も、お訊きにならないのですね？！ 貴女は、私なんぞ、どうでも宜いつて譯なんですわね！」

「あたしは自分がすべきやうにしたまでです！」

「貴女は、途方もない、無茶な、無分別なことをなすつたのです。」

「何も分別がこの世で一番大切なものぢやないからね！」

「まあ、無駄口は控へませう！……極めて單純な正義といふものを貴女が不都合にも無視なすつたといふんです！」

「注意して置くがね、トーマス、そんな調子で物を言ふのは、お前の方で子として親に對する尊敬を無視してゐやしないかね！」

「だが、お母さん、お答へしますが、私はあなたにまだ一

度だつて、その尊敬を忘れたことはありませんよ、然しです、店や家族のことで、男の家長として、また、お父さんの代理としてこの地位につくと、息子としての私の資格は、破滅するのですよ！」

「お黙りなさい、トーマス！」

「いゝえ、私は貴女が、御自分の途方もない馬鹿さ加減や弱點をお認めになるまで、黙つちやみません。」

「あたしは自分の思ふ儘にあたしの財産を處理します！」

「公正と分別といふことを考へると、さう貴女の思ふ儘にもなりませんよ！」

「お前がこんなにあたしを侮辱しようとは、まるで思つてもみなかつたよ！」

「私はまた貴女がこんなに容赦なく私を踏みつけになさうとは、考へても見ませんでした……」

「トム！……まあ、トム！」とベルマネーデル夫人のおろおろ、聲が聞こえた。彼女は手を揉み乍ら、風景の間の窓際に腰を掛けてゐた。一方、彼女の兄は恐ろしく興奮した足取りで室内を端から端へ歩いて行つた。またコンズル夫人は憤怒と苦痛に身を任せて、ソファに腰掛けてゐた。彼女は

一方の手をクッションの上に支へてみたが、片方の手は劇しく物を言ふ時に、卓子の鏡板を叩いた。三人ともはやこの世にとまらなかつたクララに就ての悲哀を懐いてゐた。そして、三人とも顔色は眞蒼で、我を忘れてゐた……何が起つたのであらうか？ 或る恐ろしいこと、戦慄すべきことが、關係者自身にとつても奇怪な、信じることが出来ないやうに思へた、或ることが——母と子の争ひ、苦しい口論！

それは、八月の或る蒸暑い午後のことであつた。ゼナートルが、あらゆる細慮を拂つて、ジーヴェルト・チブルチウス、同クララの兩人からの二通の書簡を彼の母親に渡してから、既に十日を経た後、この老夫人に訃報を傳へることは彼の困難な使命となつた。それから彼は葬式のためにリガへ旅立ち、妹婿のチブルチウスと一緒に歸つて来た。チブルチウスは彼の永眠した妻の里方で二三日を過ごしたり、クリスチャンをハンブルクの病舎に見舞つたりした……そして、この牧師が二日前に、再び郷里に歸つてしまつた今、コンズル夫人は彼女の息子に明かに躊躇しながら、このやうな打明話をしたのであつた……

「正貨十二萬七千五百馬克ですつて！」と彼は叫んで、合せた手を、彼の顔の前で振つた。「持參金だけのことならば！ 子供がないけれども、あの男が、八萬馬克だけは貰つて置きたいと言ふのならば！ けれども、遺産ですつて？ クララの遺産をあの男に約束をしてやる！ しかし、貴女は私に何もお訊きにならないんですね！ 貴女は私などどうでも宜いんです……」

「トーマス、後生だから、私のやつたことも正しく判断しておくれ！ あの場合、他に仕様があつたらうか？ 他に仕様が？……今は神様の御傍にゐて、すべて浮世のことから離れてゐるあの子が私に臨終の床から手紙を書いてよこしたのです……鉛筆で……顫へる手で……『お母様』とあの子を書いてますよ、『わたくし達はもうこの世では二度とお目にかゝれないでせう、それでこれは、わたくしには瞭然と感じられるのですが、わたくしの差上げる最後のお便りです……わたくしは最後の意識でこのお便りを書いてゐます、それは主人のことなんですけれど……神様は、わたくしどもに子供をお恵み下さりませんでした、然し、若しわたくしがお母様より生き永らへた場合、私の所有になりま

すやうなものは、何卒それを、若しお母様が何時かわたくしの後を追つて天國へいらつしやいますときには——どうぞ主人のものにしてやつて下さいませ、主人が生前にそれを享け楽しむことが出来ますやうに！ お母様、これがわたくしの最後のお願ひ……死んで行く者のお願ひでございます……お母様は、わたくしのこのお願ひを無下にお斥けにはならないでせう……」さうだよ、トーマス！ あたしはあの子の願ひを斥けやしませんでした。そんな事は出来ませんでした。あたしはあの子に電報を打つてやりました、それであの子は平和に眠つてゆきました……」コンズル夫人は劇しく泣いた。

「そして、私には一言だつて言はないんですね！ 私には何もかも隠すんですね！ 私なんて度外視してゐるんだ！」とゼナートルは繰返した。

「はい、あたしは黙つてましたよ、トーマス、だつてあたしは死んで行く我が子の願ひは、充してやらなければならぬと思つたからです……それにお前ならば、そんなことはお止しなさいつて、止めだてするだらう位のこととはあたしにだつて解かつてますからね！」

「さうです！ 確かに！ 私は、さうしたでせう！」

「だけどお前にそんなおせつかい、を焼く權利なんぞないでせう、子供達のうちで三人は、あたしと同じ考だものね！」

「ところが、私は、自分の意見が二人の女や敗殘の馬鹿者の意見よりも、少しは、重味があると思ふんですがね……」

「お前は、自分の弟妹達のことをそんなに冷淡にお言ひなんだね、あたしには辛く當つて！」

「クララは信心深いけれども、無智な女でした、お母さん！ それからトオニーは子供です——兎に角、彼女は私と同様、今が今まで何も知らなかつたのです、それは悪いときに、お喋舌りをしはすまいかといふ譯なんでせう？ それから、クリスチャンは？……さう、あの男はクリスチャンの同意を得たんです、あのチブルチウスは……こんなことをあの男がするなんて誰が思つたでせう?!……貴女はまだ御存知ないんですか、まだ、お解かりにならないんですか、あの男の、あの奸智に長けた牧師の手柄を？ 人非人ですよ、奴は！ 遺産横領者ですよ……！」

「婿つて、いつだつて、悪黨だわ。」とペルマネーデル夫人は沈痛な聲で言つた。

「遺産横領者です！ 何をしましたか、あの男は？ 彼奴はハンブルクへ行く、クリスチャンのベッドの傍に腰を下ろす、そして、クリスチャンを口説く、『御道理です！』とクリスチャンが言ふ、『仰せの通りです、チブルチウス。どうぞ御無事で。貴方は、私の左脇腹の痛みが、お解かりになりますか？……』……あゝ、馬鹿者と悪漢が共謀になつてわたしに楯をつくんだ！」かう言つて、ゼナートルは、茫然自失の體で、煖爐の竈の鍛鐵格子に靠れて——組合せた両手を前額に押しつけた。

かゝる激怒の發作は事情に相應はしいものではなかつた！ 確かにまだ一度だつて誰も、彼がこんなになるのを見たことがない、かういふ状態に、彼を置いたのは、かの正貨十二萬七千五百馬克ではなかつた！ それは寧ろかうであつた、前々から既に刺戟されてゐた彼の感情の中で今回の事件がまた、最近數ヶ月の間彼が商賣上の取引や市政のことで經驗しなければならなかつた敗北と屈辱の連鎖に結びついたのだ……何ものも最早服従しなかつた！ 何ごとも最早彼の望み通りにはならなくなつた！ 先祖代々の家のなかで最も重大な事件に關して「度外視される」ほど

事態は悪化して來たのか？ ……リガの牧師が彼に後足で砂をひつかけるほどまでに？ ……彼は恐らくそれを未然に妨げることが出來たであらう、然し、彼の勢力は全然試されてもみなかつた！ 事件は彼の存在を無視して進んだのだ！ 然しながら、彼にはこんなことは以前ならば起り得なかつたであらう、以前ならば敢て起りもしなかつたであらう！ といふやうな氣がした。是は自己の幸福と權勢と未來とに對する彼獨自の信仰の新しい動搖であつた……そして、これは彼の心の中の無力と絶望にはかならなかつた。それがたま／＼この母親と妹を前にしての口争の際に飛び出して來たのだつた。

ペルマネーデル夫人は立ち上つて、彼を抱擁した。「トム」と彼女は言つた、「どうか、心を鎮めて頂戴！ 正氣に返つて頂戴！ あれはそんなに不可いことなんでせうか？ 貴方は本當に病氣になりますよ！ チブルチウスはこの先、そんなに長生きをするとは限らないし……そして、あの人が死んぢまへば、この遺産だつてまた私達のとこへ歸つて來るわ！ だけど、若し貴方がお望みなら、あれは變更しても宜いんでせう！ 變更は出來ないでせう

かしら、お母さん？」コンズル夫人はただ啜泣で答へた。

「いけない……駄目だ！」とゼナートルは懸命になつて片方の手で弱く否定する手つきを言つた。「あれは、もう、あの儘にして置くよ。まさか、私が裁判所に駆け込んで、お母さんに訴訟を起して、内輪のことを明るみへ出して恥の上塗をするやうなことも出來まいからね。あれは成行に委せるよ……」と彼は言葉を結んで、力無い足取りで硝子戸の所まで行つたが、其處でもう一度立ち止まつた。

「ただね、家の景氣が好いなんて、思はないやうに」と彼は聲を曇らして言つた、「トオニーは正貨八萬馬克を失つたんだ……それから、クリスチャンは自分の所帯の費用五萬馬克を無くなした上に、もう彼は是ざつと三萬馬克の前借を使ひ込んである……これはまだ殖えるだらう、彼奴には収入つてもものがないし、エーンハウゼンでの療治代も要るだらうから……それにクラトラの持參金が永久になくなつたばかりでなく、その上、將來彼女の分前全部も或る期間までは家から出て行くんだ……それに商賣の方も面白く行かない、絶望的だ、丁度家の普請に十萬ばかりかけた頃からだ……全くさうさ、今此處でやつてるやうなこんな悶着が惹

き起される家庭なんぞ碌なものではない。言つて置くが、一言だけ言つて置くが、若しお父さんが生きてゐなすつたら、この場にゐらつしやつたら、お父さんは手を合せて私達一同の爲に神の御慈悲をお願いになるだらう。」

八

戦争と喊聲、分宿と多忙！ 普魯西の將校達はゼナートル・ブッデンプロオクの新邸宅の二階の寄木細工張にした部屋々々の中で働いてゐる、主婦の手に接吻する、そしてエーンハウゼンから歸つたクリスチャンに案内されて俱樂部に行く、一方メンゲ通りの家ではママゼル・ゼーヴェリーオン、即ちコンズル夫人の新しい小間使であるリークヒエン・ゼーヴェリーオンは他の女中達と一緒に、蒲團の山を兵士等で一杯になつてゐる「大支關」、舊の離れへ曳摺つて行く。

到る處雜沓と喧騒と緊張！ 兵隊の群が市門から出て行く、新しい群が入つて來る、市内に氾濫する、喰ふ、眠る、市民の耳朶を太鼓の響、喇叭の合圖、號令の掛聲で充たす、そして再び進軍して行く。王子達が歓迎せられる。通過行進が通過行進に引續く。それから靜寂と期待。

晩秋と冬に入つて軍隊は凱旋する、再び分宿させられる、そしてはつと胸を撫で下ろした市民の歡呼に送られて家路につく。——平和。六十五年の短かい、風雲を孕んだ平和。

そして、二つの戦争の間、褶襷のある前掛洋服を着けた柔かい縮れ髪の幼ないヨハンは氣儘に、靜かに、庭の噴水の所か、或はわざ／＼この見のためにといつて小さい柱廊によつて三階の上り口から仕切られた「露臺」の上で、四年六ヶ月の彼の年配の子供の遊戯を楽しんでゐる……この遊戯の深い意味と魅力を大人は決して理解することが出来ない、そしてこの遊戯には三個の礫か、或は蒲公英の花を兜に被つてゐる木の端切が一つありさへすれば他に何も要らないのだ。然し就中必要なのは喜悅に満ちたこの年頃の純眞で力のある、熱烈で無垢な、妨げられず、嚇されもしない想像力である、この頃には人生はまだ我々に手を觸れることを恐れてゐて、また、義務も責任も敢て手を我々にかけてようとはしない。我々は見、聞き、笑ひ、驚歎し、夢みる事が許される。社會はまだ色々な務めを我々に要求しはしないのだ……この頃には、我々が愛したいと思ふ人々から性急にやい／＼と、是等の務めを我々が立派に果すことが出

來るといふ前兆や最初の證據を求められることはない……嗚呼、それは決して長い夢ではない、やがて、粗野な壓倒的な力であらゆるものが我々の上に落ちかぶさつて來て、我々を押へつけ、訓練し、伸ばし、縮め、傷めるのだ……

大きな事變がハノオの遊戯してゐる間に起つた。戦争が燃え上つた、勝利がどちらともつかず揺めいてゐるが、間もなく極つた。そして賢明にも普魯西側に立つたハノオ。ブッデンプロオクの故郷の市は、埃太利を信賴したがためにその代償として自由市たることを廢止しなければならなかつた富裕なフランクフルトを稍々満足げに眺めた。

然しながら、休戦開始の直前、七月にフランクフルトの或る大商店が支拂停止をやつた際ヨハン・ブッデンプロオク家は一氣に正貨二萬ターレルといふ纏つた金額を失つたのであつた。

——第七章了——

植木製本所納

昭和七年二月廿三日印刷
昭和七年三月三日發行

非賣品

第二期
世界文學全集(11)

ブッデンプロオク一家
第十六回配本

翻譯者 成瀬無極
發行者 佐藤義亮

發行所 新潮社

東京市牛込區矢來町
電話牛込 八八八八八
八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

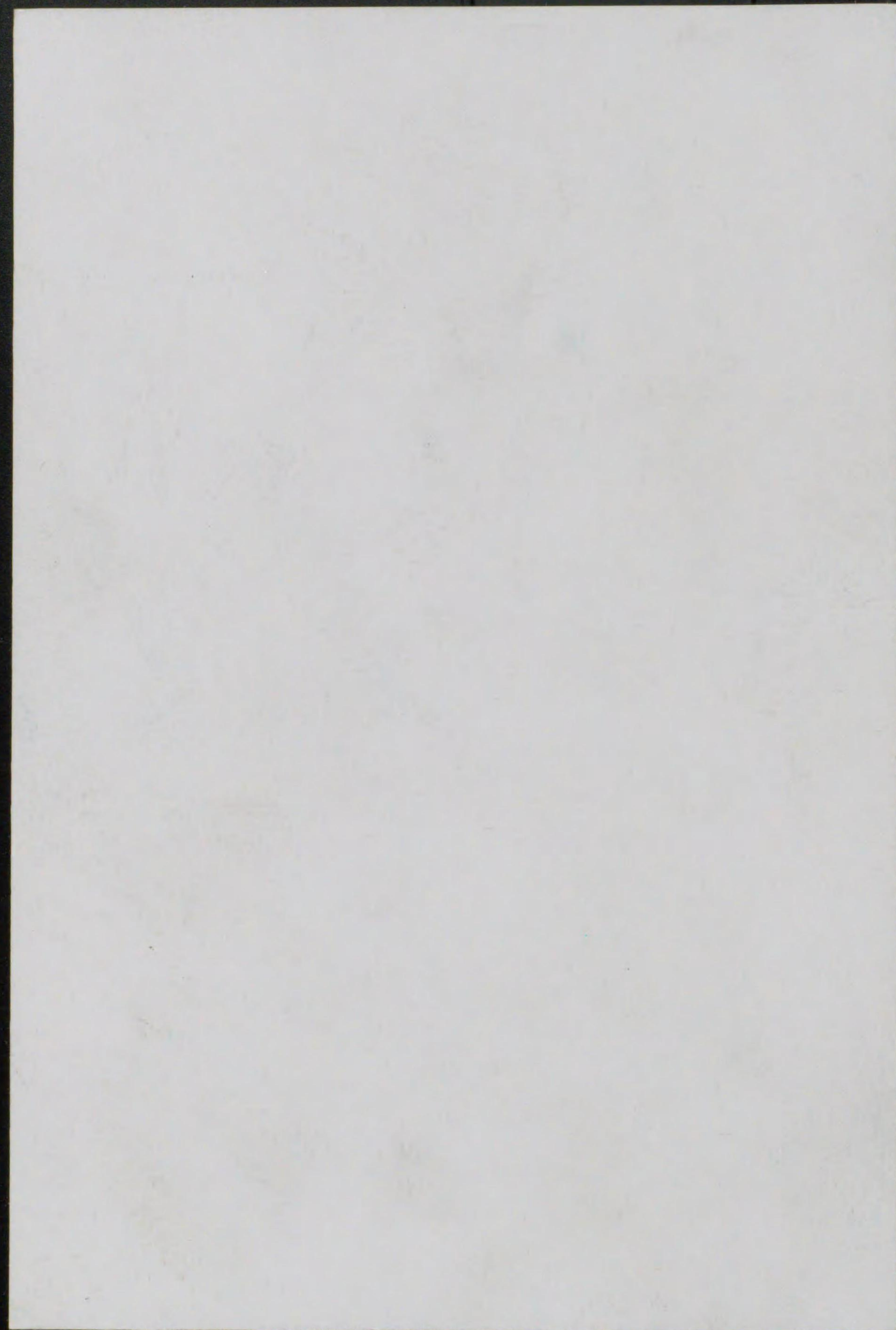
振替東京 二三、四五〇番

刷印社會式株刷印士富 町川戶江西區川石小市京東

第二期 世界文學全集 ▲印は既刊 □印は近刊

- ① 根こぎにされた人々 (モオリス・パレス) 吉江喬松 譯 □
- ② 弟子 (ブルジェ作) 山内義雄 譯 ▲
- ③ 燃え上る青春 (ド・レニエ作) 堀口大學 譯 ▲
 深夜の告白 (デュアメル作) 中村星湖 譯 ▲
- ④ 赤と黒 (スタンダル作) 佐々木孝丸 譯 ▲
- ⑤ ジエイン・エア (フロンティ作) 十一谷義三郎 譯 ▲
- ⑥ ロード・ジム (コンラッド作) 谷崎精二 譯 ▲
 クローム・イエロー (ハックスレイ作) 森田草平 譯 ▲
- ⑦ トーノ・バンゲー (H・G・ウエルズ作) 宮島新三郎 譯 ▲
- ⑧ 百パーセント愛國者 (シンクレア作) 早坂二郎 譯 ▲
 人われを大工と呼ぶ (早坂二郎 譯 ▲)
- ⑨ ジェニイ・ゲルハート (ドライサー作) 高垣松雄 譯 ▲
 白い牙 (ジャック・ロンドン) 北村喜八 譯 ▲
- ⑩ 猫橋憂愁夫人 (ズウテルマン作) 生田春月 譯 ▲
 池谷信三郎 譯 ▲
- ⑪ ブッデンプロオク一家 (トオマス・マン作) 成瀬無極 譯 ▲
- ⑫ トンネル・外二篇 (ケツラアマン作) 秦豊吉 譯 ▲
- ⑬ 最後の線 (アルチバアシェフ) 米川正夫 譯 ▲
- ⑭ 決闘。ヤマ (クウプリン作) 昇曙夢 譯 ▲
- ⑮ 穴熊 (レオーノフ作) 中村白葉 譯 ▲
- ⑯ 悪死のパスカル (デレツダ作) 有島生馬 譯 ▲
 (ピランデルロ作) 岩崎純孝 譯 ▲
- ⑰ 地中海 (イバーニエス作) 永田寛定 譯 ▲
- ⑱ 嘘の力。人の生 (ヨハン・ボオエル) 宮原晃一郎 譯 ▲
 世の界の顔

602
24

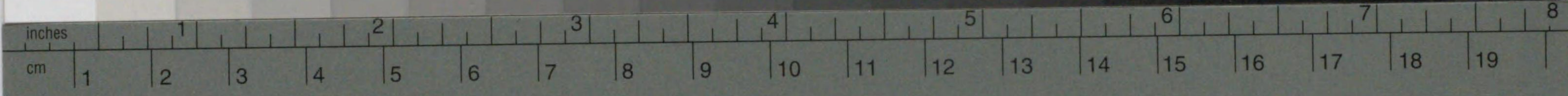


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

